

高齢者の主観的幸福感に影響を与える要因の検討

—百寿者に注目して—

蔡 羽淳

日本の高齢化率は2016年に27%に達した。65歳以上の高齢者は3461万人であり、80歳以上の人口だけでも1000万人を超えたことが報告されている(総務省統計局, 2016)。さらに、百寿者(100歳以上の人を指す)の人数が6万人を超えたことも報告されている(厚生労働省, 2016)。先行研究において、百寿者は身体機能が低下しても主観的幸福感を維持していることが示された(権藤・広瀬, 2012; Jopp, Park, Lehrfeld, & Paggi, 2016)。そこで本研究では、百寿者の身体機能と幸福感の関連を確認する。また、百寿者が幸福感を維持するための要因を探索し、得られた要因が加齢に伴って発達するかを検討する。

研究1では、百寿者の身体機能と主観的幸福感の関連を調べることを目的とした。対象者は、鳥取市在住の超高齢者(90歳群)と百寿者(100歳群)であり、最終的に90歳群81名、100歳群23名の合計104名を分析対象者とした。調査内容は、基本属性、日常生活動作、認知機能、要介護度、主観的幸福感であった。百寿者は身体機能の低下にかかわらず、主観的幸福感が維持されることが明らかになった。百寿者は身体機能の低下に対する心理的な適応が進行していることが推察された。

研究2では、百寿者の主観的幸福感が維持できる要因を探索するため、百寿者の主観的幸福感の構成要素を検討することを目的とした。百寿者5名に対するインタビュー調査の結果を分析した。その結果、「他者との良好な交流関係」「前向きな気持ち」「限界を意識する」「あるがままを受け入れる」「感謝感情を持つ」という5つのカテゴリーを抽出した。この中でも「感謝感情」は、従来百寿者の主観的幸福感に関連する要因として注目されていなかった。この研究を通じて得られた結果をもとに、百寿者が幸福感を維持することに対する感謝感情の働きについて、以下のモデルを想定した。百寿者は、他の年齢群と比較して身体機能の低下した者が多く、他者からのサポートを受ける機会の増加が想定される。したがって、他者からのサポートを受けることで、対人的な感謝感情が生じやすいことが推察される。生じた感謝感情は、身体機能の低下によって生じるネガティブな感情を調整するよう働きかけ、ポジティブな感情状態を維持することが可能となる。このようにして、ポジティブな感情が保たれている状態では、現状に対する一般的な感謝を感じることができるため、幸福感が維持できると考えられる。

研究3では、感謝感情の加齢変化および感謝感情と主観的幸福感の関連を検討した。また、感謝感情が身体機能の低下によって生じる幸福感の低下に対する調整効果に注目して検討した。高齢者を対象とした長期縦断研究であるSONIC調査(<http://www.sonic-study.jp/>)の2010年から2012年までのデータを用いた。70歳1000名、80歳973名、90歳272名の、合計2245名を分析対象とした。調査項目について、自立の指標として老研式活動能力指標、感謝感情の指標として日本語版老年的超越尺度の低位因子の「ありがたさ・おかげの認識」、主観的幸福感の指標として人生満足度を用いた。まず、年齢と性別を独立変数、感謝感情を従属変数として、二要因分散分析を行った。次に、人生満足度を従属変数として性別、教育歴、感謝感情、老研式活動能力指標を独立変数として重回帰分析を行った。その際に、感謝感情の調整効果を検証するため、感謝感情と自立機能の交互作用を確認した。

その結果、年齢及び性別によって感謝感情に差がみられるかを検討した結果、年齢の主効果が有意であった。多重比較(Tukey法)の結果、感謝感情が70歳群よりも80歳群・90歳群のほうが高かった。また、年齢群ごとおよび年齢群を込みに行った重回帰分析の結果、各年齢群の分析および全年齢群込の

分析において、感謝感情と人生満足度の間に正の相関がみられた。しかし、感謝感情と老研式活動能力指標の交互作用はいずれの分析においても有意ではなかった。本研究の結果、感謝感情は70代から80代の間に発達することが示唆された。また、いずれの年齢群においても感謝感情と人生満足度の間に正の相関がみられたことから、感謝感情は高齢期において主観的幸福感を維持するための心理的要因の一つであると考えられる。一方で、感謝感情の調整効果はいずれの年齢群においても検出されなかった。本研究の対象者群においては、感謝感情は身体機能の低下に対する幸福感の低下を抑える働きを持たなかった。特に自立の低下が生じやすい90歳群では、主観的幸福感に対して感謝感情のみ正の関連が見られたが、70歳群、80歳群と異なり身体機能については有意な関連が見られなかった。したがって、90歳群では身体機能の低下に対する心理的適応において、感謝感情以外の要因があると推察される。

本研究は、いまだ研究蓄積の少ない百寿者の幸福感に関して、身体機能が低下しても主観的幸福感が維持できるという現象を解釈するための、ひとつの枠組みを検討した点で意義があると考えられる。また今回、百寿者の主観的幸福感の関連要因として感謝感情が抽出されたが、これは日本人に特有の特徴である可能性もある。したがって、本研究は、日本人の実情に即して高齢期の主観的幸福感に関する研究を進めていくための導入としても意義深いと考えられる。本研究では、高齢期に主観的幸福感を維持することを説明する新たな要因として、感謝感情が見出された。今後、高齢期における感謝感情と主観的幸福感の関係については、そのメカニズムを含め、更なる研究が必要と考えられる。(臨床死生学・老年行動学)